

日本語学習における動機づけと自己調整学習ストラテジーの関係
 THE RELATIONSHIP BETWEEN JAPANESE LEARNING MOTIVATION AND
 SELF-REGULATED LEARNING STRATEGIES

山下順子, 広島大学
 Junko Yamashita, Hiroshima University

1. はじめに

第二言語学習者が効果的に言語を習得するためには、自律的な学習が必要だと言われている (Dickinson, 1987; Kormos and Csizér, 2014)。近年では、教室指導でも画一的な指導ではなく、学習者一人ひとりに応じた指導の必要性 (Ryan and Deci, 2013) が指摘されており、学習者の個人差に留意する傾向にある。IT 技術の進歩により学習者の学習方法が多様化したこと (Benson, 2001; White, 2008) もあり、自律学習の理論はますます教育現場に応用されつつある。

学習者が自身の学習を管理することが自律学習の基本的な概念である (Holec, 1981) が、その能力の獲得は容易ではない。実際には、学習を開始するための動機づけや、学習行動を継続・維持するための調整能力が不可欠である (Little, 1991; Zimmerman and Schunk, 2014)。つまり、自律学習の解明には、動機づけ、自己調整学習との関わりを明らかにすることが必須である。

2. 動機づけ

動機づけの理論は Gardner と Lambert による一連の研究を発端とする。統合的動機づけとは、「目標言語を話す人々や、その文化に対する好意的な態度から、第二言語を学ぼうとする動機を持つこと (Gardner, 1985)」を指し、道具的動機づけは、より高い成績をとりたい、高いレベルの大学や企業に入りたい、会社で昇進したいなどといった利益や損得により引き起こされる動機づけである。Gardner の動機づけ理論は長い間脚光を浴びたが、これはカナダのバイリンガル環境下という目標言語を話す集団や文化に根ざした理論であったため、目標言語文化への態度と動機を混用している (Crookes and Schmidt, 1991; Ellis, 1985)、統合的動機づけの定義が曖昧で、動機づけが単なる学習理由としか捉えられていない (Dörnyei, 1994) といった批判が挙げられた。これにより、統合的動機づけ・道具的動機づけは新たな視点を求める動きが生まれた。

1990 年代以降に提唱された Deci and Ryan (2002) の自己決定理論は、自己決定性 (i.e. 学習をどれだけ自律的に行うか) の度合いから動機づけを段階的に捉えた理論である。学習者の動機づけが、「やれと言われるからやる (外発的動機づけ)」、「良いと言われたからやる (取り入的動機づけ)」、「自分にとって重要だからやる (同一化的動機づけ)」、「面白い、楽しいからやる (内発的動機づけ)」というように、移行可能であることを示した。それに伴い、学習への自己決定性が高まり、より自律的な学習行動を行うとされる。この理論から、動機づけがいかに学習者の自律性に関係しているかが窺える。

3. 自己調整学習

自己調整学習とは、学習の計画や開始、モニタリング、学習制御、内省という学習のプロセスを経る中で、認知・メタ認知、感情、行動といった領域の学習調整行動を起こすことであり（Pintrich, 2000）、近年、自律学習に繋がるとして注目を浴びている。

自己調整学習において用いられる学習行動のことを自己調整学習ストラテジー（Self-regulated learning strategy）と呼ぶが、自己調整学習は学習のプロセスに注目していることから、自己調整学習ストラテジーはより多面的であり、認知、メタ認知、行動、環境設定といった様々な行動が含まれる。自己調整学習ストラテジーは、教育心理学を中心に数多く分類がなされているが、その多くは認知面を扱ったものが中心的で、動機づけの側面を中心とした自己調整学習ストラテジーの検討はあまり行われていない（Dörnyei and Ushioda, 2011; 伊藤・神藤, 2003）。

第二言語習得分野では、Dörnyei (2001) による自己動機づけストラテジーの5分類が注目されている。Dörnyei は第二言語学習者の動機づけに焦点を当てた以下5つの自己動機づけストラテジーを考案した。

表1 第二言語学習者の自己動機づけストラテジー（Dörnyei, 2001）

1	遂行調整ストラテジー	目標を達成するために学習を維持する
2	メタ認知調整ストラテジー	自身の学習をモニタリングしたり、学習計画や学習内容を再構築したりする
3	意欲喪失調整ストラテジー	学習中の退屈さを軽減したり、学習を面白くしたりする工夫をする
4	感情調整ストラテジー	気分転換などをして、集中を取り戻そうとする
5	環境調整ストラテジー	周りの助けを得るなど、環境を利用する

これは、学習者が学習中にやる気を失った時や、学習が思い通りに進まない際に使用する、自分自身の動機を高めるためのストラテジーである。自己動機づけストラテジーは、学習中におこる学習者の動機づけに焦点が当たっており、学習者が自身の動機づけを調整し学習管理を行うために使われるストラテジーである。そのため、動機づけに焦点をあてた自己調整学習ストラテジーとしても認知されており、自律学習に有効だと言われている。Tseng, Dörnyei, and Schmitt (2006) は、Dörnyei (2001) の分類に基づいた質問紙項目を作成し、項目の信頼性・妥当性を検証した。

4. 動機づけと自己調整学習ストラテジーの関係

教育心理学を中心に、動機づけが自己調整学習ストラテジーの使用に影響を与えていることが証明されている（Wolters, 1998; 伊藤・神藤, 2003; Kim and Kim, 2014; Kormos and Csizér, 2014）。しかし、その多くは認知ストラテジーに焦点を当てており、動機づけに関わる自己調整学習ストラテジーへの検討はなされていない。Kormos and Csizér (2014) は英語学習者を対象に、統合的・道具的動機づ

けと Dörnyei (2001) の自己動機づけストラテジーの関係を検討している。Kormos らの研究でも、動機づけが自己調整学習ストラテジーに影響を与えていることが証明されたが、どのような動機づけが各ストラテジーに影響を与えているのか、その因果関係までは明らかになっていない。学習者の動機づけの種類に応じて、使用する自己調整学習ストラテジーが異なる (Wolters, 1998; 伊藤・神藤, 2003) ことから、動機づけとストラテジーの直接的な関係を検証する必要があると考えられる。

また、統合的動機づけは、態度と動機の混用 (Crookes and Schmidt, 1991; Ellis, 1985) や定義の曖昧さ (Dörnyei, 1994) が指摘されていることから、Gardner の統合的・道具的動機づけに代わる枠組みを使用すべきである。Deci and Ryan (2002) の自己決定理論は、動機づけが自律性の程度によって分類されており、且つその分類が移行可能であるため、4 段階の内発的・同一化的・取り入れ的・外発的動機づけと自己調整学習ストラテジーの関係を検証することが妥当だと考えられる。

そこで本研究は、学習者のどのような動機づけが自己調整学習に影響し、学習の継続や自律学習に効果的であるかを明らかにするために、自己決定理論の動機づけと自己調整学習ストラテジーの因果関係を検証することを目的とする。

5. 調査概要

本調査は、韓国国内で日本語を学習している高校生 201 名、大学生 184 名の合計 385 名を対象に実施した。新学期が開始される 2015 年 9 月に高校、大学を訪問して質問紙調査を実施し、データを収集した。

動機づけの項目は Deci and Ryan (2002) の自己決定理論の枠組みを使用し、前 18 項目を 7 段階尺度で評価させた。項目は、Deci and Ryan の動機づけの段階を、第二言語習得の分野に応用した Noels, Pelletier, Clément, and Vallerand (2000) の尺度を使用した。また、自己調整学習ストラテジーは Dörnyei (2001) の自己動機づけストラテジーを使用し、Tseng, Dörnyei, and Schmitt (2006) によって信頼性・妥当性が検証された項目を使用した。質問紙項目は全 20 項目で、全て 5 段階尺度である。

動機づけ、自己調整学習ストラテジーの項目は全て英文であるため、先行研究を参考にしながら、筆者自身が日本語への翻訳を行った。日本語から韓国語への翻訳にあたっては、日本の大学院に在籍している博士課程の韓国人留学生、そして韓国の大学で日本語教育を専攻している大学 4 年の 2 名に依頼し、バックトランスレーションを行った。調査依頼時には、2 名ともに N1 を取得済みであり、翻訳を担当した 2 名は本調査に参加しなかった。

分析にあたり、回答が途中で放棄されているものや、全ての項目に同じ値を回答しているものなど、有効な回答と思われないデータは除外した。その結果、高校生 194 名、大学生 184 名、計 377 名分の回答を分析対象とした。まず、構造方程式モデリングを行う前段階として、モデルを構築する因子を特定するため、動機づけの項目と自己調整学習ストラテジーの項目それぞれに対して探索的因子分析を行った。そして、動機づけと自己調整学習ストラテジーの因果関

係を探るために、因子分析で得られた因子構造を用いて構造方程式モデリングを行った。

6. 結果

6-1. 探索的因子分析（動機づけ）

動機づけ項目の分析は、主因子法、プロマックス回転を用いた。その結果、4つの因子構造が得られた。それぞれの因子に含まれる項目の内容から、第一因子を「高揚感」、第二因子を「達成感・満足感」、第三因子を「外発的動機づけ」、第四因子を「取り入的動機づけ」と命名した。分析結果から、韓国人日本語学習者は、日本語を聞いたり話したりする際にワクワクするような高揚感を感じていること、また、日本語を勉強することで自身の成長や達成感を感じていることが明らかとなった。そして、Deci and Ryan (2002) の理論と同様、外発的動機づけと取り入的動機づけの因子が得られた。韓国人日本語学習者は、日本語に対して高揚感や達成感、満足感を感じると同時に、将来の就職やより良い待遇を得ること、日本語ができないことに対する羞恥心も抱いていることが明らかと鳴った。表2に動機づけ項目の因子行列を示す。

表2 動機づけ項目の因子行列

		I	II	III	IV
I高揚感 ($\alpha=.91$)	日本語が話されているのを聞くと、ワクワクする。	.89	.01	.02	.01
	日本語で会話をすると、楽しくてワクワクする。	.88	.02	.02	.02
	日本人が日本語を話すのを聞くと、嬉しくなる。	.87	.07	-.01	-.04
II達成感・満足感 ($\alpha=.92$)	自分自身の成長のために大切だと思う	-.09	.83	.06	-.06
	何か新しいことを発見した時の満足感を得たい。	.01	.75	-.01	-.13
	日本語の勉強で成果を出すことが楽しい。	.23	.69	-.10	-.06
III外発的動機づけ ($\alpha=.89$)	将来、良い企業に就職したい。	.01	-.02	.88	-.03
	仕事に就いた後も、給料などよい待遇を得るため。	.02	.02	.87	-.03
IV取り入的動機づけ ($\alpha=.76$)	日本語を知らなかったら、罪悪感を感じる。	.10	-.06	-.03	.88
	日本人の友達と日本語で話せないと恥ずかしい。	-.03	.06	.04	.75
固有値		2.38	2.20	1.55	1.38
累積寄与率		.22	.42	.56	.68

6-2. 探索的因子分析（自己調整学習ストラテジー）

次に、自己調整学習ストラテジーの分析結果を示す。分析には主因子法、プロマックス回転を用いた。その結果、5つの因子構造が得られた。それぞれの因子に含まれる項目の内容から、第一因子を「意欲調整」、第二因子を「メタ認知調整」、第三因子を「遂行調整」、第四因子を「環境調整」、第五因子を「学習継続調整」と命名した。この分析結果から、韓国人日本語学習者は、日本語学習の際に感じるストレスや退屈さ、疲れに対処し、学習意欲を高めるストラテジーを

使用していることが窺える。また、学習中に集中力を持続させ、学習内容を終わらせようと自身の学習をモニタリングして、メタ認知的なストラテジーを用いていることも分かった。そして、目標を必ず達成させようと自分を鼓舞する遂行調整ストラテジーや、学習環境に配慮しようとする意識があることも窺える。最後に、日本語の勉強をやめたい、勉強に飽きて勉強が続かないような状況でも、ストラテジーを使用して学習を継続させようとしていることが明らかとなった。表2に自己調整学習ストラテジー項目の因子行列を示す。

表3 自己調整学習ストラテジー項目の因子行列

		I	II	III	IV	V
I意欲調整 ($\alpha=.91$)	自分なりのストレスを解消する方法に満足している。	1.05	-.03	-.14	-.06	.03
	学習中に感じる退屈さを取り除く方法に満足している。	.80	.12	-.17	-.06	.07
	先延ばしを防ぐための自分なりのやり方は効果的だと思う。	.69	.04	.01	.00	-.03
	退屈さを感じたとき、気分をコントロールする方法を知っている。	.69	-.13	.17	.04	.01
	勉強中の疲れを解消する方法を知っている。	.66	.06	.12	.02	.00
IIメタ認知調整 ($\alpha=.76$)	集中力を持続させるために自分なりの特別なやり方を持っている。	.06	1.04	-.17	-.03	-.07
	学習しようと思った内容を終わらせるための特別なやり方がある。	-.10	.61	.21	-.06	.07
III遂行調整 ($\alpha=.69$)	目標を達成するためなら、どんな困難も乗り越えられると思う。	-.02	-.14	.97	-.03	-.08
	自分が立てた目標を到達するまで決してあきらめない。	.04	.09	.48	.08	.09
IV環境調整 ($\alpha=.66$)	勉強するとき、良い学習環境を探すようにしている。	-.02	-.05	-.01	.99	.01
	学習環境が大切であることを知っている。	-.09	.05	-.08	.47	.08
V学習継続調整 ($\alpha=.55$)	ストレスを感じたときは、すぐにやめたいと思う。(反転項目)	.06	-.06	-.08	.02	1.02
	学習に新鮮さがなくなったら、学習が続かなくなってしまう。(反転項目)	-.08	-.02	.07	-.10	.41
固有値		3.56	1.55	1.45	1.33	1.24
累積寄与率		.24	.34	.44	.53	.61

6-3. 構造方程式モデリング

最後に、6-1、6-2の因子構造を用いて構造方程式モデリングを行った。学習の動機づけが自己調整学習ストラテジーの使用を促すことから、動機づけから自己調整学習ストラテジーの方向にパス係数を引いてモデル構築を試みた。適合度を確認しながらモデルの修正を重ね、得られたデータが最も適合するモデルを採択した。最終的なモデルを図1に示す。図1のモデル内の数値は、全て標準化推定値である。紙面の都合上、観測変数と誤差は省略する。最終モデルの適合度指数は、GFI = .873, AGFI = .840, CFI = .915, RMSEA = .068, ACI = 713.232であった。

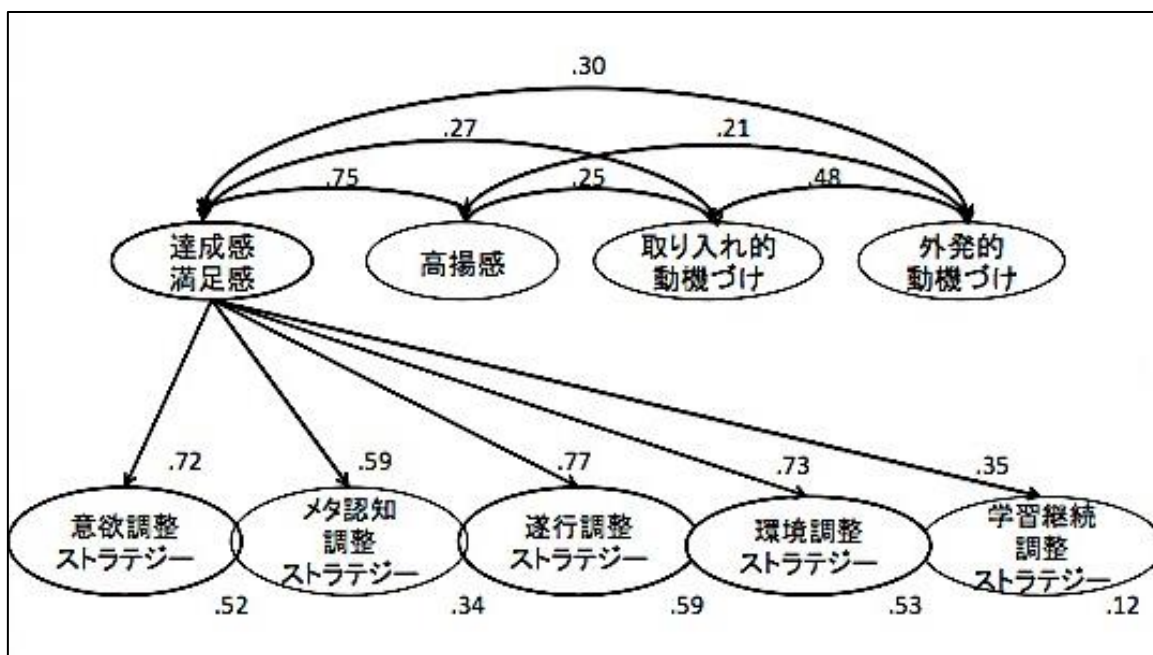


図1 動機づけと自己調整学習ストラテジーの最終モデル

図1の最終モデルから、達成感・満足感が全ての自己調整学習ストラテジーに影響を与えていることが判明した。特に、意欲調整ストラテジー、遂行調整ストラテジー、環境調整ストラテジーへの影響度は、3つとも高い数値が得られた。これより、韓国人日本語学習者は、日本語の学習で感じる達成感や満足感が自己調整学習ストラテジーの使用を促し、学習を継続させていることが明らかになった。

7. 考察

本調査では、自己決定理論の動機づけ項目を用いた、動機づけと自己調整学習ストラテジーの因果関係の解明を試みた。その結果、達成感や満足感が、意欲調整ストラテジー、遂行調整ストラテジー、環境調整ストラテジーといった自己調整学習ストラテジーの使用に影響を与えていることが明らかになった。つまり、韓国人日本語学習者の場合は、学習に対する満足感や達成感を感じることで、学習を継続させる最大の要因であることが窺える。

この結果を教育現場に応用させるとすれば、日本語の学習に退屈さやストレスを感じており学習意欲が低い学生や、自身で立てた目標の達成が見込めないような学生たちに、達成感や満足感を与えられるような機会を提供することで、学習の継続を促すことができるであろう。自分自身で学習を継続させることで自律学習へとつながり、効果的な学習習慣を身につけさせることができると考えられる。

しかしながら、今回の調査では、学習者が行う具体的な学習行動との関係までは検証できていない。本調査で用いた Dörnyei (2001) の自己動機づけストラテジーは、学習者の意識にはたらきかけるものであっても、実際の学習行動として表れるとは言い難い。また、学習者が行う自律的な学習行動にも多様性がある

(Benson, 2001) ことから、自己調整学習ストラテジーがどのような学習行動につながるのかを、今後更に検証する必要がある。そして、本調査では学習者の日本語学習歴や習熟度を考慮した分析を行わなかった。今後は、日本語の学習歴や習熟度を要因に含め、日本語能力が高まるにつれて自己調整学習ストラテジーや学習行動にどのような変化が表れるのかを調査することで、時間経過や学習発達などを伴った理論構築を目指すことが可能だと考えられる。

参考文献

- 伊藤崇達・神藤貴昭 (2003) 「中学生用自己動機づけ方略尺度の作成」『心理学研究』74, 209-217.
- Benson, P. (2001). *Teaching and researching autonomy in language learning*. Harlow, UK: Pearson Education.
- Crookes, G., and Schmidt, R. W. (1991). Motivation: Reopening the research agenda. *Language Learning*, 41, 469-512.
- Deci, E. L., and Ryan, R. M. (2002). *Handbook of self-determination research*. Rochester, NY: The University of Rochester Press.
- Dickinson, L. (1987). *Self-instruction in language learning*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Dörnyei, Z. (1994). Motivation and motivating in the foreign language classroom. *Modern Language Journal*, 78, 273-284.
- Dörnyei, Z. (2001). New themes and approaches in second language motivation research. *Annual Review of Applied Linguistics*, 21, 43-59.
- Dörnyei, Z., and Ushioda, E. (2011). *Teaching and researching motivation* (2nd ed.). Harlow, UK: Longman.
- Ellis, R. (1985). *Understanding second language acquisition*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Gardner, R. C. (1985). *Social psychology and second language learning: The role of attitude and motivation*. London: Edward Arnold.
- Holec, H. (1981). *Autonomy and foreign language learning*. Oxford, UK: Pergamon Press.
- Kim, T., and Kim, Y. (2014). EFL students' L2 motivational self-system and self-regulation: Focusing on elementary and junior high school students in Korea. In Csizér, K. and Magid, M. (Eds.), *The impact of self-concept on language learning* (pp. 87-107). Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Kormos, J. and Csizér, K. (2014). The interaction of motivation, self-regulatory strategies, and autonomous learning behavior in different learner groups. *TESOL Quarterly*, 48, 275-299.
- Little, D. (1991). *Learner autonomy 1: Definitions, issues and problems*. Dublin: Authentik.
- Noels, K. A., Pelletier, L. G., Clément, R., and Vallerand, R. J. (2000). Why are you learning a second language: Motivational orientations and self-determination theory. *Language Learning*, 50, 57-85.

- Pintrich, P. R. (2000). An achievement goal theory perspective on issues in motivation terminology, theory, and research. *Contemporary Educational Psychology, 25*, 92-104.
- Ryan, R. M., and Deci, E. L. (2013). Toward a social psychology of assimilation: Self-determination theory in cognitive development and education. In Sokol, B. W. Grouzet, F. M. E. and Muller, U. (Eds.), *Self-regulation and autonomy: Social and developmental dimensions of human conduct* (pp. 191-207). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Tseng, W. T., Dörnyei, Z., and Schmitt, N. (2006). A new approach to assessing strategic learning: The case of self-regulation in vocabulary acquisition. *Applied Linguistics, 27*, 78-102.
- White, C. (2008). Language learning strategies in independent language learning: An overview. In Hurd, S. and Lewis, T. (Eds.), *Language learning strategies in independent settings* (pp. 3-24). Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Wolters, C. (1998). Self-regulated learning and college students' regulation of motivation. *Journal of Educational Psychology, 90*, 224-235.
- Zimmerman, B. J., and Schunk, D. H. (2014). *Handbook of self-regulation of learning and performance*. New York: Routledge.